

第2回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成17年6月26日（日）午後1時30分～午後4時30分

2 場所 長野県松本合同庁舎 203号室

3 出席委員

中條 利治委員長	小山 勉委員
百瀬 哲夫副委員長	下川 隆委員
小口 利幸委員	丸山 哲弘委員
宮川 正光委員	藤本 光世委員
今井 隆一委員	長谷川 功委員
野口 廣子委員	鈴木 義明委員

4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。それでは委員長よりよろしくお願いいたします。

（中條委員長）

あらためまして、お忙しい中、お暑い中ありがとうございます。

それではただ今から、第2回第四推進委員会を始めさせていただきます。予定では今日14人中の委員の方で10名出席ですので、まだ小口委員さんが見えになっていらっしゃると思いますが、おいおいいらっしゃると思います。定刻になりますので、進めさせていただきます。

すでに新聞報道等で、皆さんはご存じかと思いますが、第2通学区、それから第1通学区の推進委員会、第2回が行われておりまして、また金曜日に新聞報道に出ておりましたけれども、我々の手元にも県教委のほうからもらいました。

まず県教委のほうから、実際の状況、概況のコメントをお願いいたします。

（米澤教育次長）

それでは、教育次長の米澤修一です。

私のほうから、24日の第二推進委員会に出させていただきましたが、その第二推進委員会の様子、それから第一推進委員会の2回目の様子等お伝えさせていただきながら、5分くらいご説明させていただきます。

5月29に第1回の推進委員会を開催させていただきました。そのときにさまざまなご意見をいただいたわけでございます。高校の魅力づくりを考えたいというご意見、また一定の期間であります推進委員会の責務を果たすべく、なんらかの具体的な案を早く出してもらいたいというようなご意見、それから委員が校名を出して案を出すというのはなかなか大変だというような、さまざまな声の中で、新聞報道等でご案内のように、多くの市町村の団体等から、その学校の存続等に関する意見書をいただくようになりました。この意見書には、自分の学校の個々、個別の学校の存続を求める動き、また推進委員会で具体的

な校名を出さないでというような、ほぼ同じような文面の文章が多かったわけですが、そういう中で私どもとすれば、良くも悪くも地元を背負っていらっしゃる推進委員の方々の議論に、一定の制約が生まれていくのではないかと、そのことによって推進委員会が機能しにくくなるのではないかという危惧（きぐ）を持ったわけでございます。

そのような中で、新しい高校像を描きながらの具体的な議論が進まないとなれば、私どもの未来を見据えた高校改革の大きな計画がもし進まなくなるということであれば、これは根本的な問題になりますことですから、そのような危惧（きぐ）の中で、時期尚早というようなそしりも覚悟しながら候補案を出させていただいたわけです。

すべての学校の関係者が自分の学校を残してもらいたい、その気持ちは本当によく分かるわけです。すべての学校に歴史があって、そのスピリットが脈々と語り継がれ、また新しく創造されてきているわけです。そのような歴史の中、それぞれのご意見をお伺いすればすべての学校を残すということになる、そうすると89校全く何もできないという高校づくりになるわけです。そういう苦渋の中の、本当に難しい議論を今、私どもはしているわけでございます。その、また難しいお仕事を推進委員の方々にお願いしているわけでございますけれど、この推進委員会が何らかの制約の下に動けなくなるのではないかという危惧の下にやらせていただいたということで、ご理解いただきたいと思うわけであります。あくまでもたたき台ということで、各推進委員会の議論が深まる、そういうような願いを持ってお願いしたわけでありますので、ご理解をいただければと思います。

第二推進委員会は6月19日に開催されておりますから、少しお伝えさせていただきます。まだ候補案も出す前の段階ではありますが、そこでの議論は総合学科、多部制・単位制についての、かなり具体的な魅力づくりというようなことが検討されました。しかし、また一方で校名のない状態でなかなか手詰まりだなという感覚も、委員の皆さまにはおありになったような感じがいたします。委員の中には、今日は高校名が出ると思ってきたが、というような声があったりする中で、一定の進捗をするためのものがなにか必要だという感覚を受けたわけでございます。

昨日の第一推進委員会の様子についてもお伝えさせていただきたいと思います。新聞等の見出しで、例えばある新聞社の見出しは「校名公表に委員反発」とありました。またある新聞は「県立高校再編案に反響」というようなことであります。しかしまた、ある新聞では「賛否両論だ」と、また「たたき台と候補案を確認した」という表現もありました。私はそこにずっと立ち合わせていただいたわけですが、いろいろ受けとり方はございましょうけれど、全部の会議にいらっしゃったのかなと思う気持ちもあるわけでございます。新聞報道をご覧になりますと、一方的に批判、反発が相次いだと受け止めるかもしれませんが、私のほうから感じた会議の様子をお伝えさせていただきたいと思います。

確かにこの様な議論がございました。議論の矢先に候補案が出るのはおかしい、撤回をというようなご意見も出された委員もありましたし、また別の委員の方は「議論は各校の積み重ねの上ですべきで、地域がどう考えているかを知ってからだと、これではリストラのようだ」というご意見も伺いました。また、別の委員は再編候補案が出たことで魅力づくりの検討はできないのではないかという意見でございましたけれども、両方は両立し合一するんだという委員長のお考えに、最終的にはどの委員の方も合意をされておられました。

一方で、話し合えと言われてもなかなかできない、この案を出してもらったのは、具体的なものがあってありがたいというご意見もありました。また、第1回目から校名を委員会に出して議論するのは難しいという空気があって、今回校名を出してもらったことは、委員会の責務を果たすという上でありがたい、またこの話題もあるが県教委と一緒にやっていきたいので、委員の意思統一を図りたいというようなご賛同のご意見もいただきました。

第一推進委員会の委員長は終始、校名のない状態では推進委員会の議論はできない、校名を出すことの影響も分かるが、県教委が改革プラン検討委員会、懇話会、パブリックコメント、地域懇談会と議論を積み上げた上で責任を持って候補案を出したことは、時期尚早という思いがあるにせよ、評価をしたいというお考えを持って発表されております。

推進委員会、その責務遂行のため、積極的に継続進行することについて、大きな合意の下、会の後半では魅力づくりのひとつとしての総合学科の検討に入りました。具体的には塩尻志学館の、立ち上げからその現況について詳細かつ実質的な検討が行われ、次回はその関係資料も幾つか要請がありましたけれども、それについての検討と、また多部制・単位制についても、詳細な検討をするということでございました。

総じて述べさせていただければ、候補案の提出時期についてのご異論はございましたけれども、候補案が推進委員会審議のたたき台、材料ということについてはご理解をいただいたというふうに思っております。次の推進委員会に向かって前に進まなければいけないというのが第一推進委員会全委員の総意であったと、私どもも十分感じ取れた会議でございました。委員長は、今日議論がスタートしたという言葉でしめくぐられ、次回に向かわれると、そんなふうに受け止めさせていただきました。以上ご報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(中條委員長)

ありがとうございました。

それでは今回はまず最初に、前回、第1回の説明資料についての質問等がありまして、各委員の中から、こういったさらに補足の説明がほしいということもありますので、金曜にやりました、再編整備候補案というのもこの中に入っておりますので、まず事務局のほうから資料の説明をお願いしたいと思います。

5 資料説明

西牧主任教育支援主事から資料説明【説明内容省略】

6 議事

(中條委員長)

膨大な資料です。ご説明いただきました中で、多分ここがよく分からなかったとかいろいろあると思いますが、皆さまの意見の前に、この資料に関して、先ほどの高校再編候補案を含めて、この資料の中でも、まずご質問からお願いしたいと思います。

(鈴木委員)

簡単な質問なんですけれど、ちょっと説明の時間が長いですね。

再編の4通なんですけれども、木曽山林高校と木曽高校の普通教室、それと大町高校、大町北校高の普通教室は、要覧を見たんですけれど、木曽山林高校が11あるということは分かったんですけれども、あとが分かりません。

(西牧主任教育支援主事)

木曽高校につきましては、保有普通教室数ですが、20です。木曽山林高校が10です。大町高校ですが普通教室が13、大町北高校が18でございます。

(中條委員長)

他にご質問はありますか。よろしいですか。私から質問します。

大町、大北地区の定時制というのはどうなんですか。木曽地域だけが再編ということのようですか。

(西牧主任教育支援主事)

池田工業高校に普通科の定時制があります。その地域はそのまま設置ということです。

(中條委員長)

他に質問はよろしいですか。

それでは、おいおいまた議論を進めていく中で、この資料に対する、疑問等あればお願いしたいと思います。

それでは審議に入ります。前回、少なくとも第2回、今日につきましては、魅力付け、まず削減ありきではなくて、魅力付けから議論したらどうかというような方向付けです。それから時間経過の中では、先ほどご説明いただいた、先週の金曜日24日になりますけれど、たたき台が提示されました。今日の検討の進め方といいますか、議論について、まずは魅力付けということで、前回もございましたが、それについて、各委員の方からのご意見を伺うという予定で、一応今日の議事としてはそこにありますように検討事項として魅力ある高等学校づくり、それから県立高等学校の再編整備、それから総合学科、高校に多部制・単位制高校の配置、この3点を第2回、今日の委員会の中で取り上げてということで進めたいと思いますけれども。

(鈴木委員)

前回の議論の中では魅力づくりについて、最終報告にもあるけれども、宮川委員のほうから、魅力ある学校って本当は何なのかという意見が出されたりして、魅力とは何かということを探そうということになって、それが一番いいのかなというふうに思っていたんですけれど、突然この候補案というのが出たわけで、恐らくマスコミだとか、傍聴の方も、そのことについて興味・関心を持っていることと思うんですね。そのところは先にやっておかないといけないと思うのです。いかがでしょう。

(中條委員長)

具体的には何を、ですか。例えば是々非々をそれぞれ皆さんにするのですか。

(鈴木委員)

意見だと思いますがね。

(中條委員長)

意見ですか。

(宮川委員)

ここの委員さんの意見ですか。

(中條委員長)

すみません、なければ、進めさせていただきます。宮川委員、鈴木委員がお話がありましたように、現在のご意見を確認する。

(宮川委員)

やはり、この前私がお話しをさせていただいたのは、生徒にとって、子どもにとって魅力のある学校、親にとって、あるいは地域性がありますから、例えば地域の発展、いろいろ考えたら、その地域にとって魅力のある学校、それが何かという議論がないと。今度もう示されてしまったから、すごく言いにくいのですが、こういうものが先に出てしまうと、そちらの肝心の今後の教育の在り方だとか、今後の長野県をどうしたらいいかとか、あるいは地域はどうしたらいいかとか、そういうことが飛んでいってしまうような気がするんです。せっかく改革プランというのをやろうというのですから、やはり抜本的に何十年たっても、それが生きてくるような議論をしていただいたほうが本来ではなかったかなと思うのです。

ところが、実際は昨日、一昨日ですか、このように出まして、いろいろな背景はありますけれど、こういうのが出ますと、この地域、例えば木曾高校であれば、木曾高校を支えている方、産業を持っている方、それぞれの思いが交錯してしまいまして、本当に魅力のある高校はなにかという議論が飛んでいってしまうような気がするんです。それを危惧するんですが、そう言っていることは何になるんでしょうかね。

(中條委員長)

ほかにもご意見ございますでしょうか。

(百瀬委員)

私も魅力ある高等学校づくりという、これも大事な問題だと思っているわけですが、今までそれぞれの高等学校が取り組んできているいろいろなことがあるわけですが、そういうものを整理して、そしてそれを今後どういうふうに進めていくのか、あるいは同じような取り組みを、幾つかの学校で進めているような場合には、経験を交流し合ったりとか、

そういうようなことができるわけですので、その上に立っての再編整備ということを考えていくというのが一番まっとうなことではないかと思うのです。そういう意味では、今日出された資料の中に関連した、何番でしたか。

（中條委員長）

A4、1枚、過去の取り組みですね、9番です。

（百瀬委員）

9番ですね。これも関連しますよね。そういった、現状はどうなっているかというのをお互いに、我々は確認をし合わないで議論が進まないのではないかと、そんな気が今しているわけです。その辺はいかがでしょうか。

（中條委員長）

ほかにございますか。

（小口委員）

先ほど、宮川さんがおっしゃったように、魅力というのは、子どもにとって魅力か、先生にとって魅力か、親にとって魅力か、地域にとって魅力か、非常に抽象的になってしまうので、結論が出ないのではないかと最初は危惧していたわけです。そんな中でこの具体的な議論に入れるステージをいただいたので、中條さんが申しえたように、県教委の心意気を感じたと、全く私も同感の覚悟で、同じことを言っておりますけれども、私も別にそうではないかと。

すでに1年以上、この委員長はメンバーとして研究してきた中でのこのスタートですから、同じことをやるなら、私は休ませてもらおうかと思っていたくらいなものですから、具体的な各論に入れることは非常にいいと思います。

昨日、伊那北高校で田中知事と生徒との対談ということで、私も出さしてもらいましたが、そこで言われてひとつ印象に残ったのが、当事者たる高校生の声がどのように反映したのか、反映されるのかという点なのですね。高校生が純粋に考えていたので、知事もなかなか回答に苦慮していたという感じがしました。そのような純粋な子どもたちの意見というものを、短い間で反映できるかどうか非常に委員としての重責を感じているところですが、その辺からの切り口で魅力を語るならいいのですが、抽象的な魅力は私学にむしろ任せてもいいのではないかと。この中で私学の観点で、多少薄れてはいますが、現実には長野県の高校生の受け皿として、永きにわたり私学に頼ってきた現状がある中で、もっとも公立高校はもしかしたら注目して、私学のための道を開いておくことも、ある時期には必要なことだと思っています。私学だからつぶれていいなんて現況は全くないと思います。

多々、申し上げましたが雑ばくですが。

(中條委員長)

ほかの委員の皆さん、いかがでしょうか。

それでは、1、2点訂正させていただければと思います。私は県の高校改革プランには入っておりません。教員評価のほうにしまして、これが私のやったものです(名札の肩書き)。それから、私は間違いなく、先ほど読んでいただいたここには、事例でいえば、これまで以上の推進、木曽山林高校がこれまで培ってきた林業に関する専門教育をさらに充実・発展させていくような考え等々、文章がずっと入っているんですが、少なくとも新聞報道にはそういうものは全く見られていなかった。私が申し上げたかったのは、そうした背景なり思いが少なくともこの文章から感じられるのではないかと。この是々非々は別にして、自分たちが考えて「なぜか」ということを伝えたいということは、今後の進め方で感じられたということを申し上げたかったのであって、ああいう報道をされると、単に近いから2校を1校にというような印象を県民の方が受けてしまわないのかということ、私は逆に懸念はしております。そういう意味で我々も感想を踏まえて十分議論していきたいと思っています。

高校改革プランを何度も読み返しましたし、それから第1回目にいただいた資料を何度も見る中で、今日も魅力付けの話があったんですが、各高校なり魅力が付けば、魅力付けをすれば、高校数は維持されるのか、89校のままでいいのか。逆にまず削減ありきとってはいいかもしれませんけども、この前の説明の中で、生徒数という説明はいただいたんですけれども、そうした種々の状況の中で、今後のいろいろな子どもたちの将来を見、その思いを考える中で、まずは削減というか、統合をして、その上でその高校の魅力をどうするのかっていう議論なのか、そこが私ははっきり申し上げて分からなかった。従って魅力付けをするのであれば、その魅力付けすることによって、少なくともこの通学区の高校数を維持できるのか、維持できるという我々の資料を出さないと、納得していただけないでしょうし、逆にそうでないとすればどうするということも含めて、議論しないといけないという気が個人的にはしたんですが。その辺先ほど魅力っていうお話もありましたけれども、どんなふうに皆さんご覧なのか、そこをぜひ確認した上で議論に入っていきたい、魅力づくりの議論をするならば、そういう議論をしていきたいと思いますけど。

一応高校改革の最終報告、それから前回そろえてもらった県教委の説明を、今、私が申し上げたものをパンフレットにすると、魅力付けと適正規模という書き方になっていますけれども、その2つの検討を、どういう位置付けで我々はとらえて議論していけばよろしいか。

もう一回、すいません簡潔にご説明を。

(吉江高校教育課長)

高校教育課長の、吉江でございます。

もし資料で、最終報告第1回目お配りしたのを、あればご覧いただきたいと思うんですけど、18ページをご覧いただきたいと思います。

今、委員長さんからお話がございましたように、魅力づくりと、あるいは数はというお話しでございましたが、まず私どもが一番危惧しておりましたのが、18ページの下にある

グラフの折れ線が、過日に説明申し上げましたように、平均学級数です。平均学級数のピークがここにございます、平成2年が7.21。そういう状況でございます、このままの89校を維持してまいりますと、平成31年のところで非常にいろいろな数字が交ざっておりますので見にくいかもしれませんが、4.17という数字がございます。これが平均の数字です。ですから89校の平均が約4クラスということは、1学年1学級の学校が多々できてしまうと、あるいは2学級という学校が多々できてしまうというのが現状でございます。

これをこの報告書でいただいた、概ねの目安である76校というような数字に替えた場合どうなるかというものが、丸が薄く塗られているグラフになります。上から2番目の折れ線グラフです。ご覧いただきますと、おおむね5.5を中心にしたところでしばらくは動いてない。平成30、31にはまた大きな減少を迎えますので、31年には5.0を下回るという事態になってくるということで、まずはある程度以上の生徒数を維持することによって、教育効果を上げたいということが、第一前提でございます。ただそれと合わせまして当然ながら、ある程度、幅のある学校が今後できてくると思っています。

先だって私どものほうでお示しました、あくまでも検討の材料ではございますが、候補案の中に具体的な名前が載ってこなかった学校の中には、すでに募集定員が1学年2クラスというところもございます。そういう学校を今後いかにして、この報告書にございますように1学年2学級を下回らない学校にしていくかということを考えた場合は、そういう学校についてどんな教育を、あるいはどんな事をやっていくことにより生徒さんが、積極的に集まっていただけになる学校になってくるかということも考えていかなければいけないと考えています。そんなことで魅力づくりという項目がありまして、非常に委員長さんのご質問に対して、お答えしづらい、あるいはお答えになっていないという面もあるかと思いますが、1として私どもが教育委員会にお願いいたしました「魅力づくり」とそれから2としてお願いしたいいわゆる「適正な規模および配置」というのは、そう意味では極めて並列的な影響があるということでご理解いただければと思っています。

(中條委員長)

先に吉江教育課長から言われたもので、質問しづらいんですけども、因果関係ではないんですか。魅力付けは魅力付けで議論して、例えばですけど、いろいろ個別の取り組みが始まって、あとは新聞報道でございまして、例えば木曽山林高校が全国募集したと。それで、実績可能性が検証できている、個人的に検証できているわけではありませんが、仮に木曽山林が全国募集し、もしくはほかの学校が同じように全国募集し、想定している生徒数がいわば増加に転じるですとか、維持できるってということが仮にあったときには、じゃあ削減ってことは、数を減らすとか統合することがなくともいいのか、もしくは、減少することあれば、いくら頑張ったところで、全国から集めてもそうそう増えるものではないと思いますし、魅力づくりは全く別に考えていかなければいけないということだと思います。

(米澤教育次長)

分かりました。

例えば、今日資料を出させていただいた総合学科または多部制・単位制高校というもの

を考えると、いろいろな母体を取りあえず総合学科はあるとして、専門学科ではなく例えば普通高校を中心としてつくる場合もある、農業高校を中心として作る場合もある、工業高校を中心としてつくる場合もある、商業高校そのほかに、いろいろまたそれを複数組み合わせたりするということもある。そうことを考えながら、魅力づくりと統合の考え方を同時並行にしていくということは、やはり生じてくると思うんです。ばらばらにいくということではなくてですね。

それから今、委員長さんがおっしゃったような、ある高校がある工夫をしたことで、今後維持していく様子が想定できるということでもやる場合も、もちろんあるかもしれませんが。しかし未来の予想形でそこを全部やるということよりは、今ある状態の中でどういう工夫ができるのかということを考えながら、例えば5年目にこうなるはずだから、ここは対象にならなくてもいいんじゃないかということにはなりきれないのではないかと思います。読み切れない部分は確かにあると思います。

ただ、今の総合学科、多部制・単位制等も魅力的なひとつの候補として、材料として考えていただけたらと思います。今ここに示させていただいた、いろいろ魅力のアイデアが幾つかありますけれども、これについては例えば「この地区ではこういう組み合わせによって、こういうことができるんじゃないか」とか、そういう行きつ戻りつといいますか、各論と総論の中で行きつ戻りつしながら、双方見合いながら順に進めていかれるとよいのかなと、そういうふうに思っています。

（中條委員長）

委員の方からご意見、ご質問を。

（下川委員）

少子化というところで、平成31年までがデータで示されているわけですがけれども、今回の高校再編整備につきまして、これが第1次再編で31年まで行くのか、第1次、2次も含めての視野を入れてそういう計画があるのかどうか、これ一発で終わるのかどうか。

ここら辺はどうなのでしょう。

（吉江高校教育課長）

私どもは、現在確実にこれが第1期で、第2期は次回いつからあるというようなことは考えておりません。しかしながら、ご覧いただきますように平成30年、31年と大きく落ち込んでまいります。先ごろから報道されておりますように、いわゆる出生率の低下ということがございますから、この傾向が恐らくは続くだろうと考えております。そうした場合にこれが第1次で次回が第2次だという意味合いではなくて、私ども長野県の場合には、先ほどご覧いただきましたように、よその県の場合には既に終わった計画を、もう1回見直ししている県もございますが、そういうところとの兼ね合いで考えますと、今回この計画を受けて実施した場合に、ある程度の時期に再度この内容を見直すというような事態になることはあり得るという理解はしております。ですから、これが終わって何十年も先、このまま行くというような形には、将来的にどうなるかということはもちろん何とも言えませんけれども、当然ながらそういうようなことはやって行かなければいけないと考えて

いる次第でございます。

それで、参考までにちょっと申し上げますと、現在平成 31 年までは、生まれてきたお子さんの数で予想した数字で、そういう意味では極めて実数に近いものということでご提示させていただいております。ただ例えば最終報告を裏から見ていただいて、P19 というところに、日本の人口推計というものがあるわけですが、その人口推計でご覧いただいても確実に 15 歳から 64 歳の層が落ち込んでまいります。またご覧いただければと思いますが。これが現実でございます。長野県は、よその県や全国と比べましても高齢化が進んでる傾向ということも言われておりますから、この傾向というものは、全体の国の動きから見ましても避けられないものだと感じている次第でございます。

（中條委員長）

ほかにご質問ございますか。

（丸山委員）

はい、お願いします。

先ほど委員長さんおっしゃいましたが「魅力ある高校が維持できれば、89 校体制は」という話がありまして、その資料として前回 5 月 29 日に配られた資料 7 があるんですが、5 月 29 日の資料 7 の 10 区、11 区、12 区の募集学級数を見ますと、平成 17 年度、それぞれ 10 区、11 区が 70、12 区が 12 です。その数は 10 区においては平成 22 年まで維持、11 区については平成 30 年まで、12 区については平成 25 年まで学級数は維持されているわけです。今、一番話をしなくてはいけないのは、魅力あるところかなと思うのです。再編成する数を考えながら魅力づくりを審議するのか、魅力あるというのを優先するのか、私は前者のほうが、取りあえず今のところは必要かと、資料 7 から見て感じたんですけども。

（中條委員長）

今の丸山委員のご意見は、少なくとも第 4 通学区に関して、いったん数字というか計算根拠になっている 5 学級を平均として維持をするときに、まず再編っていうことをしなくていいんじゃないか、そのために逆に魅力づくりをまずやった上で、それがどうなるか議論すべきだ、そういう理解でよろしいですか。

（丸山委員）

まずは、今回特に子どもにとってということに焦点を当てたとしたら、まずこれからだと。数のうんぬんっていうのは、次回とか先にいった話をするのが大事だと思いますけれど、ということです。

（中條委員長）

今のご意見、についていかがでしょうか。

(野口委員)

私もそのとおりだと思います。数を優先的に考えるのではなくて、まず魅力ある地域、一番は子どもたちにとってということでありまして、魅力ある学校をどういうふうにつくっていくか。魅力ある学校をつくることによって、学校を維持されるという方向もこれから考えられるんじゃないかと思いますんで、是非そういうところを十分に考えるべきではないでしょうか。

(中條委員長)

すいません、今おっしゃった魅力づくりにおいて、その全 89 校の高校を想定されるイメージでおっしゃっている高校は維持されるという、維持の中身はどういうこと。

(野口委員)

今、先生が言われたように数字的なことですね。

(中條委員長)

減らさなくてもいいのではないかとということですか。

(野口委員)

はい。いけるんだったら、まず優先されるのは、魅力ある高校づくりじゃないかなと思います。

(中條委員長)

県教委にお聞きしますけれども、先ほど回答で同時並行とおっしゃったのですが、今のままで議論をしていってよろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

ちょっと、何てお答えしていいかというのがありますが。

ただ、いずれにしても先ほどもお話しもございました資料 7 ですが、例えば平成 2 年のピークでご覧いただきますと、旧 10 通学区が比率で 35.3 という数字になっているんです。それと第 11 通学区が 62.3、で第 12 通学区が 49.4 ということで、ほぼ半減するような数字になってしまっているのです。それで魅力づくりというようなことでというのは、もちろんある程度以上の学校を維持しつつ、その学校のそれぞれの学級数がある程度に維持したいという前提で考えております。

先ほど若干、中條委員長さんのほうからお話しがございましたが、全国公募ということをやっている学校があるとして、その全国公募によってこの現象を、後ろから逆にとどめるといって、あるいはこの現象をさらに逆にプラスに転じさせるような力にまでなることは難しいと考えています。それを考えますと、魅力づくりの議論は、当然ながらいただくわけですが、それと合わせて、この通学区におきまして、お示し申し上げていただきます学校の数ということも、当然念頭に置いていただいた上でご議論いただくということをお願いしたいと思います。

(中條委員長)

委員の皆さんの共通理解が図れば、それで議論を進めていけばいいと私は思っておりますけれども、魅力と適正規模という、すでにもう案が出てきてますので、統合と言ったほうがいいのかもしれませんが、その両案といいますか、両方について我々は責任を持って議論を進め、何かしら説明を求められているわけですが、そのそれぞれ2つについての理解は皆さんよろしいですか。

(今井委員)

委員のほうに示された基本的な資料といいますと、事務局からの説明のとおりで、教育費に掛かっている年間予算が2,000億円前後。2,000億を中心はずっときているわけですね。だけど現実には30年みたときに生徒数が半減になるということは、本来であれば教育費も半減しないと、教育費の比率だけ多くなってきて、要は土木費がかなり削られていますけれども、結果的にどこかで、しわ寄せが出てくるということがあるわけです。

やはり財源の問題は絶対日本にもあって、それを考えていったときに、まず高校にも再編は避けられないと私は思っているんです。ただ再編するときに、やみくもにここがここの生徒数だからどうのこうので減らしていくとか、そういう単純なことであれば、県会議員に話をして、県の議会で「ここ、減らします」と言えば、そんなのはOKなんです。だけど、この委員会があったのに、なぜそれをやらなければいけないのか、きちっと県民に説明する義務があるんですよ。

その説明する案と、もうひとつ、正直言って現在の高校で、ここの学校の生徒のときから伸びるなっていうことを真剣に取り組んで、真剣に教育やっていた学校って、私の見る限り数校しかないんですが、ただ高専は、私全国周りますけど、大体年間7、8校回っていますが、高専って非常に明確になっているんですよ。学校によってカラーが全然違うんですね。そういう実態なんです。それって正直言って本当に魅力のある学校づくりを、そこの先生方が本気でどの程度やろうとしている、そこにかかっている。そこが薄れてくると学級数が減ってしまうのです。やっぱり、結果的に淘汰(とうた)されてしまう。そういうものの一番基本になるものは、その学校を出たときに、将来どういうふうな自分の人生が見通せるかとかいう夢を持って、学生生活を送れるかどうか。そういうことをきちっと説明した上で「でもこういうことをやっていく上で、それなりのお金も掛かりますよ」、例えば今ザッと見ますと「ＩＴ関連の教育をします、生徒に1台ずつＰＣ持たせてやりたい」とかいう話も入っていますけれども、そういうことをやるにしても、やはりお金が必要なんですよ。だからただ、学校の維持をすることによって、本来やらなきゃいけないようなことでもお金を回せない、学校維持をすることに関してのみきゅうきゅうとしてしまって、本来の学校の教育の質を高めることにお金を使えないという状態になってはまずいんです。

だからやはり別々に論議とかではなくて、現状からした場合に、ある程度学校数は落としても学校の教育の質は上げていく、「そのための報告がこうですよ」というのは、僕は高校の改革の推進委員会の役割じゃないかと思っております。確かに学校の再編案が出されたことに対して、私は「ああ、そうなんだ、じゃあこれだけ決めるんだったら、別に委員会いらないな」と感じたのは確かですが、それは事務局が言われたように、ただの

たたき台だというふうに、我々は理解して進めればいいんじゃないかと。どうやって限られた原資の中で学校の教育、高校の教育の質を上げるかということを、まず論議していただきたいんです。

本当に申し訳ないんですけど、「大系線」という名前を挙げてはいけないんですけど、会社に来られたお客さんから「今井さん、大系線の学生って、あれ何だい」と言われます。これ何だと思います。高校生が、車両の電車のトイレの前に本気で座り込むんですね。トイレの前ですよ。トイレの出入口の前。でも、この子たち家庭へ入ったら、そのまま飯食うのかなと。これって、本当に高校生ですよ。高校生としてのマナーだとか、自分の生きざまだとかいうものを身に付けている生徒っていうものを見つけられないんですよ。だから何かもうちょっと、きちっと将来に対して夢のある生活を、高校時代にさせてやりたいなと思っているんですよ。

私も、経済団体から「今井さんやってよ」と言われて「いいですよ」と言ってこの場に出させていただいていますが、単純にそういう気持ち。今の高校の場合、高校数ありきうんぬんというよりは、もっと一番重要な問題は、どうやって高校生に本当に実のある高校生活を送ってもらえるか。ちなみに高校数が関係するのは、私は田舎で育ったものですから、小学校が30何人のクラスで3クラス、高校へ行ったら40何人のクラスが8クラスあるんですね、高校へ行ったら大体そのくらいですね。でも規模が大きいと、自分の位置付けはよく分かって、ものすごく自分が努力する材料にはなっている。小学校のままだと、私は多分お山の大将だったですね、何か訳の分からん人間、勉強もしないような人間になっていたと思いますね。ある程度の規模にするというのは、そういう効果もあるというのは、昔自分で感じて思いましたので、このまあいって各学校見たら、高校でも1学年1クラスという高校があるかな？というのが私の考えで、非常に疑問が残ります。

それともう1つ外から入れて生徒数が維持できればいいんじゃないかというのは、先ほど事務局のほうからも否定的な意見が出されましたけれども、私も全くそのとおりで、思い違いもあるのですが、この場合、私学じゃなくて、県立高校、100%我々の県民の税金から立ち上がっている、まあ公費も入っているんですけども、そういう観点からしても、その部分で他県の方を呼び込んで拡大していく姿っていうのは、県民の財政負担を大きくする要因になるということで、あまりそれは現実的じゃないと感じています。

(中條委員長)

いずれにしても個別に議論ではなくて、経費というのはどこまでベースに入れていいかは別として、ある程度質を高めるが、学年の学級数という部分を含めて質を高める。高校としては質を高める、維持していくためには、統合するなら統合し、その上で本当に高校生活、質のよりよい魅力づくりというもので議論していく。

ほかにご意見ございますでしょうか。

いったんすいませんが、はっきりした上で魅力づけなら魅力づけ、数の目標なら数というふうに移りたいとちょっとこだわっていますけど。

(藤本委員)

今、高校の魅力づくりということで規模の問題、さっき今井委員さんが言われましたように、高校っていうのは後期中等教育といいますか、子どもが自立するところで、高校出たら独り立ちしなきゃいけない。いろんなところへ散って、あるいは地元就職、あるいはほかに就職する子もいるかもしれませんが、自分がその何かやろうとする意欲、自分がやりたいという意欲があることを認めて、我々から見て半分大人の扱いをしてやらなきゃいけないと思うんです。お互いに切磋琢磨して、個性のぶつかり合いといったものは高校という段階で絶対必要だと思うんです。それはいろんなクラブとか生徒会活動とかを通してなされて、それぞれ高校の中で非常に大きな部分を占めている。それは、ある程度は比較規模というか、学校の規模がないとできない。先ほど「お山の大将」と言われましたけれども、それは高校としてのひとつの魅力だと思うんです。例えばいろんなコースを用意したり、メニューを用意して先生と生徒の関係、あるいは学校のシステムの中でできる部分と、そういった規模の中でやらなきゃならない、自然にできる部分があると思うんです。そういう意味で、魅力づくりと適正規模というのは切り離せないとは私はそう思います。

(中條委員長)

県のいわゆる高教組が、確か数週間前、信濃毎日新聞に一面広告を出して、基本的には反対であるということの議論、説明の中に、少人数学級という説明が確かあったと記憶しているんですが。今、例えば藤本委員のお話の中で、ある程度の規模は、高校としての規模は必要になる。そうしたときに、2 クラスを 1.5 分の 1 くらいにするという意味かもしれませんが、単純に今 4 クラスあるものを、例えば 6 クラスにする、2 クラスしかないものを 4 クラスにするということで、維持ができるんじゃないかという意見に対しては、藤本委員のご意見は。

(藤本委員)

私は、集団を小さくして、効果を上げるという部分は、先生と生徒、また講座をつくって、その生徒が、そのひとつの授業の中で受ける関係だと思うんですね。

私が言っているもうひとつは、全体で何かをつくり上げるというか、例えば文化祭をつくり上げるとか、あるいはいろいろなクラブの中で、お互いにぶつかり合うとか、そういった部分で、それはある程度の規模があって、例えば自分のやりたいクラブがあってできる。小さい規模では、「こういうクラブやりたい」と思ってもそのクラブがなければ、あるいは人数がいなければ、できないんです。その中で自分を思い切って出して、発揮すること。そういう場所が必要なんじゃないかというふうに思います。

(中條委員長)

ほかのご意見はありますか。

(長谷川委員)

私も現状から考えて少子化となっていくときには、どうしても意識をしないといけな
いのかなということはありません。

今の話しのとおりで、やはり大勢の子どもにかかわったりとか、それに対する影響とか
ありまして、するんですけれども、ただ、一見質の高い教育って言うのですが、ちょっと
生き方のところが幾つかありまして。学校によっては、特に高校はそうなのですが、現実
にはある程度中学生がどういうふうに進学を考えるかという、自分の得点力を考えたり
とか、いろいろと相談する中で方向を抱えながら受験校を定めたり、変えたりしていくわ
けです。それについても非常に大事な経験だと思うんです。

ただ、進め方としたら、できれば不安は極力与えないほうがいいかなと、確かに競争さ
せなくてはいけないという一面もあるんですけど、それによって結局、競争すると敗者が
出てきてしまう。先ほどおっしゃったのは、逆に暗い気持ちになって、例えば自分が行き
たくない高校に行かなきゃいけなくなったりする者もいますし、そう思ったときにその高
校がその状態だから、質の高い教育ができてないんじゃないかというような、多分違うと
思うんですよ。

その意味でひとつ目やはり大事だなと思ったのは、ここでも校名が出てきたところで、
テレビを聞いていて、私はやはり立場が立場なのかもしれませんが、非常に苦しく思った
ので、やはり進学校として、今、ちょうど部活動が中学校では終わって、さあ進学校に、
じゃあ、勤務表変えようというところのタイミングで、個々にバツと出てきたときに、非
常に不安を抱えている中学生が出てきていると。そういうふうになったときに、ただ単純
に数が多いのは確かに大事なんですけれども、実際に、そこの方たちは高校に対してどう
いう思いでいるのかとか、実際どういう思いでいるのか。やはり全然見えないところがす
ごくあって、推進委員として、並行して進めなければ仕方がないところもあると思うん
ですけど、やはりつらくてもある程度、生の声というのを聞いてみないといけないところ
あるんじゃないかなと感じがします。

話が長くなってしまうかもしれませんが、その性格について、もう少し慎重に何かでき
ないかなというところが正直ありまして、実際に魅力づくりって言いながら、なかなか違
和感を感じるところが幾つかあって、ただ焦点をバツと人が集まるようにするために、高
校と結び付けるというのが何か変な感じがあって、その意味でも、まともなことをやって
いい結果残している、だからいい高校だというのはちょっと違うんじゃないかなと感じま
す。

(中條委員長)

ご意見は別として、進行につきまして議論にあたって慎重になるべきという意味合いで、
今後の我々の議論としてなすべき点はどうなんですか。

(長谷川委員)

1度はやはり、1回目にも出たと思うのですが、部会設置はやったほうがいいんじゃない
かと思うんですけど。旧通学区ごとの部会設置について。

(宮川委員)

発言、よろしいですか。

ただ、今の場合、旧通学区ごとに部会設置をつくっても、連絡協議会をつくっても、現実に名前が出ているところと、そうでないところと、例えばその部会で皆さんの発言をしたときに、全然違うと思うんですよ。そのことを一番心配していて、皆でやろうよと言ったときに、そういう話も出てきたと。今度部会を開いたら、その委員、代表していくところ、あるいは吸収されるという、開示されたところ、全然考えが違う。それ以前に部会をやっていて、「どうしたらいいんだろう」とやっていたのだったらいいんですけど、今後それをやっていくと、けんかの種というか、争いの種をやるようなことになってしまいはしませんかという心配を思うんですよ。

(中條委員長)

それについて何かありますか、よろしいですか。

(鈴木委員)

私が最初に発言したために、議論の方向が進まないような状況で責任を感じているのですが、もうすでに今井氏などからは、高校教育、あるいは高校教育の質の問題などについて発言があるものですから、そういう方向に突っ込んでいきながら、我々は高校教育というよりも、むしろ4通の地域の教育をどうするのかという観点が議論になるのかなと何となく思うんです。

話を戻しますと、宮川委員が言われたように、高校名が出たことから、かえって地域の声が出づらくなっているという状況があると思うんですね。我々としても、もしかして候補案ではないという意見を、出したいということになった場合にやはり出しづらい状態になってしまったのです。次長は冒頭で言っていました、委員が動けなくなることを心配して苦渋の中で出させていただいたと。出たおかげで、動けなくなるということもあるんじゃないかと思います。それは私の意見なんですけども。

質問でいうと確かに宮川委員の言われたように、大きな規模である、一定の規模があることが、メリットが多いことが最終報告でも出ているわけです。ただ一方で小規模校については、2つの言葉が使われていますが、家庭的とか家族的とかというような、雰囲気の評価しているという。第1回目で発言したんですけど、この4通は、松本市、塩尻の局と、あと周辺があるので、その場合にその周辺、北・南の周辺地域が、小規模校というそのメリットを前面に押し出して、小規模でもいいんじゃないかという議論をしていくということがいいと思います。

吉江課長は、76校を出すについては、全県から割り出したんですけども、4通として割り出す。それは最終報告の21ページにあるように、地勢なんかも考えて、細かく細かく地域の意見を聞きながら出しましょうと書いてあるわけですから、そもそも3減を出したり、校名を出したことは、まずかったのだと私は思いますね。それは、我々たたき台だと言っていますから、ここですでに質の議論が始まっているわけですから、質の議論をしていけばいいと思います。

私に言わせますと、例えば「木曽地区」というところは、ある面では地場産業の林業も

衰退を始めて、人口も極めて少なくなっている。生徒数も減っている。じゃあ、そこを放っておいていいのかという問題だと思うのです。人が少なくなると、税収も少なくなっていくと、県税の占める割合も木曽地区から納めている額は少ないじゃないか、だったら高校は1校、2校でいいじゃないかということだと、それは私立の運営ですね。

やはり公立学校について論じているわけですから、その地域をどのように生かすかということ視野において、その場合にもしかしたら2学級という小規模で生徒は大規模のメリットを、十分に受けられなくなってしまうかもしれないけれども、でもこの地域に高校の必要であれば残す、それが公立学校だろうと思うんです。私立だったら、そこには投資されないわけですけど、公立であるからこそ投資を、民間ではしないところに投資するという、そういう観点があって、南北に長くしかも過疎地域、山村地域をたくさん含んでいるこの4通の議論が成り立つわけですね。単に数で割っていくことはやめたほうがいい。旧10通でいきますと、蘇南と木曽高校は約40キロ離れていますね、そこは通学するのは無理です。

木曽高と山林という学校について、この候補案では、木曽山林に統合するというのですが、お聞きすると、普通教室が10しかない、そこへ木曽中部、北部の生徒を集めることができるのかという問題が、まず第一。さらに、10通は、そうすることで、いわゆる、専門科だけになってしまう。職業科だけになってしまう。そうすると、普通科に行きたい生徒は、これは北に行かざるを得ない。ますます、過疎化は進んでいくんですね。そういうところも、先ほど話をしたように、地域の振興、あるいは地域の活性化という視点で、いわば、教育はひとつの支援なわけで、学校はそのための施設なわけで、そういう観点で第4通の推進委員会は、話をしとかなきゃいけないと思います。北のほうの白馬の問題も、うんと、話をせんといかんです。こういう、特有な状況を我々が一番よく知っているわけですから、部会のほうも検討しながら、細かくやっていく必要がある。質をとらえた結果、もしかしたら、県のいうとおりの数になるかもしれない。

(吉江高校教育課長)

ちょっと、1点、もちろん教育委員会をご信任の上でおっしゃられていることだと思いますけれども、私も今回その統合という言葉を使っています。それと同時に1つとしまして、候補案みたいな、ああいうふうな文章化をさせていただいたということで、何と言いましょう単なる無機的な表みたいなものでお出しなかったというのは、ここの中に、実際申し上げているように、当方として考えられるという、それもひとつの考え方であるので、そのことから、当然ながら違う選択肢もそれぞれの推進委員会で考えていただきたいという前提に立っているということは、まずもってご理解いただきたいと思います。

それと、もう1つは、統合ということでございまして、ややもすると、例えばAとBを統合して、例えばAになったのか、あるいはBになったというような気持ちもあるかもしれませんが、AとBを統合することによって、いわゆる新たなCというイメージもみると、当然前提に置いて考えています。それを考えますと、今、たまたま我々が目指したように、例えばの話が、木曽山林と木曽高校で申し上げますと、蘇南高校がひとつの例のように、蘇南の場合は、今、3つの学科がある。そういうふうに、複数学科を設けるような形に当然なっていくんだらうというようなことは、これは皆さま方の議論を今後深めていただく

中で出てくる形だと思っておりますけれど。そういうようなことを、お考えいただく意味で、例えばの話が、木曽の北部においては、十分な普通科の学科がなくなるようなイメージを持たれているとすれば、そういうふうな形で当然ならないような選択を、今後統合する学校には、お考えいただきたいと思っています。また、私どもとしても、当然ながらそういうふうな前提でお考えいただいているものと考えている次第でございますので、その点はお理解いただきたいと思います。

（中條委員長）

それでは、今、ちょうど3時を回ったところであります。少し、時間を掛けさせていただいたのは、ややもすると、極論でいえば、生徒数が維持できれば、削減しなくてもいいのかということ、我々どう理解し、ということでこういう議論につながったと思っていましたし、そういう意味で、先ほどの、学級、それから学校の規模としての質問があり、それから、さらにその魅力という部分の質の向上の問題。県教委からは、あえていただきませんでしたけれども、財政的な県民の税金という面から見た場合も、生徒数の減少も踏まえてというご意見、ご議論の中で、ある程度関連付けをして考えていかざるを得ないと。そうするときに、それぞれの地域がそれを踏まえて、魅力をどうしていくか。その結果によって数がまた変わっていくこともありましようし、名前が変わっていくことも当然ありましようし、ただ、そのときにはどうしてそうなるかを、我々が説明を受ける場合ももちろんですけれども、なぜということも、説明書きをしっかりと、説明責任を果たせないというようなことではいけないので、そこは本来反対ではなくて、反対をするのはなぜかということと、それからこういうことは考えられないのか。我々が提出できないのであれば、県教委からそういった資料を提出してもらうようなやり方で、これから進めていきたいと思えます。

いったん、休憩を取らせていただきますけれども、10分程度ということで、ちょっと中途半端ですが、15分までということです。では、3時15分に再開いたしますのでよろしくお願いたします

【休憩後再開】

（中條委員長）

それでは、15分たちましたので、再開させていただきます。

先ほどの議論に伴いまして、いったん我々の中で、魅力付けの問題と、それから適正数という意味でも、一応、共通理解ができたという前提でスタートしてよろしいでしょうか。

では、それを踏まえて、それを踏まえるという意味は、まったく双方が独立ではなくて、ある程度関連付けながら議論をせざるを得ないという前提だったと思えますし、特に質という面ではいったん、この最終報告は、その少人数ということも案としてはあり得たのかもしれませんけれども、それなりの人数と、それから、それなりの学級数を持って、特にこれから社会に出ていくという観点からは高校教育を進めるべきであるという前提の魅力付けということを提案になっていたかと思えますし、それと同じような同様な意見を先ほど幾つか出されていたと思っております。そういった観点から冒頭へ、またいったん戻り

ますけど、関連付ける前に、前回ありました魅力付けというところで、もう少し具体的に突っ込んで、抽象論でいろいろ言っても、何も解決も回答も得られないし、一応考えつつ、この中に入れつつ進めていきたいと思います。

すみません、先ほど、私の説明でよろしいかどうか、いったんこの数を唱えての魅力、特に合併数というところかと思いますが。その辺の直接の関連というのは繰り返しながらいるかもしれませんが、ご覧いただいて、それをたたき台として、議論を進めさせていたきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

もう、不要ということであれば、次にいきたいというふうに思います。よろしいですか。

それでは、学級数の考え方、例えば、少人数ということを案として、意見としてはあり得ると思いますので、それも踏まえて現状の考え方を説明していただきたいと思います。

（吉江高校教育課長）

現在、長野県の場合で申し上げますと、義務教育の中で、例えば小学校の4年5年ぐらいまでを含めまして、30人規模学級というようなものを実施しています。それで、義務教育の世界では、いわゆる適正規模という推計になるかもしれませんが、標準法という法律がありまして、それでこの国の法律の中では、あくまでも、標準学級は40人であるというようなものが大前提でございます。ただ、長野県の場合には、田中知事の判断の中で、いわゆる教員の加配を行いまして、それで、小学校の段階は、順次30人規模学級が完成しているという状況にあります。

ただ、今お話し申し上げましたように、現時点においてはそういうことで、小学校の高学年にこういったものが導入されはじめようという状況になっていまして、中学までには話はいいおりません。それで、私どものほうの高校で申し上げますと、同じく標準法というもののの中に1学級は40人であるというような基準がございます。それで、この基準をベースに私どもは、根本的に今回お示ししている目安としての76校というようなもの、これをベースに考えております。

そういうことで考えますと、標準の1学年、1学級は40人をベースに乗せているということで考えていますし、また、先ほど来、話題に出ておりましたが、例えば、120人という数字が仮に設定であったとして、実際のところが、それを3クラスでみるか、4クラスでみるかという議論になってしまうかもしれない。ですから、先ほど藤本委員さんからお話ございましたように、適当な数というのは、うんと小さい学級、クラスあたりの生徒数がうんと小さい場合のクラスというのではなくて、ある程度の規模の生徒数というようなことも含めてお考えいただきたいと思います。

そんなことで考えますと、私ども総合的には、現在、おおむね6学級という言葉はふさわしくなくて、最終報告いただいている数字からいきますと、将来を見越して、5.5というようなクラス数の中で今考えていただいているわけでありましたが、それをベースに標準の、地域ごとの今後の学校の数というのをお示しして、これにつきましては、5月の教育委員会で、お決めいただいておりますので、それを基準にお考えいただきたいと考えている次第でございます。

(中條委員長)

次は、吉江課長からお話しいただいた、生徒数をベースに高等学校としての質の維持も可能であり、かつその公立の高校の魅力づけを今後どうしていくか。さらに、どうしていくかということを、議論していく必要があるという観点。

(吉江高校教育課長)

それでもう1点追加させていただきますと、あくまでも私どもがお話ししているベースというのは、1学級が40人という前提で考えているということをご理解いただきたいと思います。

また、参考までに申し上げますと、国のほうで教員配置のひとつの標準というようなものを、1学級40人というようなものをベースに、幾つのクラス数があるから、何人の教員が配置が決定かというようなことを、ひとつの単位として積算するという経過がございます。それによりまして先ほど、今井委員さんからお話がございましたので、若干付け足していただきますと、県の予算というのは、基本的に歳入というのは、皆さま方ご存じのように、いわゆる税収とそれから地方交付税といいまして、国の税が結果的に県に戻ってくるという意味合いの地方交付税。それから、国からの負担金ないし補助金とそれから、もうひとつは、県がよく言われている借金、起債と言っておりますが、大きくは、この4つで構成されております。その構成の中の1項目である地方交付税の算定基準に高校の場合には、先生の数とか生徒の数が基準として使われているということでございます。ですから、交付税の算定のひとつの基礎のデータとして使われておりますが、高等学校の場合には、国から具体的に補助金とか負担金というようなもので、財源がきていないというようなことでございます。

(中條委員長)

その場合の算定基礎が、各県まちまちではその結果が違ってまいりますので、標準法で定められた、それにのっとっても計算されているということですか。

(吉江高校教育課長)

はい、さようでございます。

(中條委員長)

それでは、それを踏まえて、魅力付け、質の向上に関わりがあると言えるかもしれませんが、それについて、活発なご意見をお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

もし、なければ、あくまでサンプルというようなことで、私も新聞報道以上の情報は持ち合わせていないんですが、白馬高校は、あれは、学校全体で有志ということなのか、高校としての魅力付けということで、取り組まれているという報道がありましたけれども、下川さん、もし分かってらっしゃる範囲で、その辺のその取り組みをサンプルとしてご紹介いただければと思います。

(下川委員)

取り組みについてですか。

(中條委員長)

はい。

どういう題名かはっきり覚えていないんですが、白馬高校として、それが学科の新設するであるとか、それを含めて地域校という言い方がある程度あるかもしれませんが、地域のほうを挙げて取り組みをしようということが始まったというのが、新聞報道であったと思うのですが、もし違ってれば結構ですが。

(下川委員)

小規模校であるほど、今回の高校再編については、すごく熱心に議論はされていると思います。学校、地域、それから行政も含めて、いろんな面で、山間部、小規模校は、なおさら強い思いを持ってやられていると思いますけれども、今白馬高校という校名がありましたので一連の流れをお話ししますと、やはり白馬というブランドというものは離せないというものがあると思います。事実オリンピック、パラリンピック、今年度はスペシャル・オリンピックスということで、特に今年のスペシャル・オリンピックスについては、大構成のボランティア活動ということも含めて、積極的に取り組んできたという事実もありますし、地域と一体となってやって押し進めていくというのが現状だと思います。

白馬高校は、県内 19 校あるうちの地域高校の 1 つであります。先日も地域高校協会の総会があったんですけども、今、その中の雰囲気では、この取り組み自体は、やはり先ほど申したように、小規模校は非常に熱心であるけれども、都市部は非常に冷めていると、この見方の温度差が非常に激しいなというところは感じております。白馬高校の取り組みですけども、この前、課長さんもいらっしゃったのですが、大北地区の 4 校魅力づくり意見交流会、これは同窓会が窓口ですけども、そういうものも発足をしました。学校内においては、校長先生が音頭を取りながら、明日の白馬高を語る会というのを、近日中に予定しております。それから、懇話会ですけども、白馬村長が会長、副会長が小谷村長ですけども、白馬高を育てる懇話会というようなことも 7 月 13 日でありますけれども、予定をされているという運びになっております。

今回、ついでお話させてもらいますけれども、具体的には大北地域の中で、大町高、大町北高という候補案が発表されましたけれども、これについても公表された基準、根拠というものがデータとしてあるのかどうか、これも後でお伺いしたいなというふうに思うんです。というのは、漠然とした文章表現というので、受け取り方が非常に誤解を招くようなところがあると思うんですね。近接距離にあるという表現がありますけれども、大町と大町北高は、何キロで、ほかに南農と豊科高校は何キロなのかとか、そういうようなデータも含めて、今回発表されたのかどうかということと、それから、大町駅からの距離等の地理的状况を考慮し、大町高の校舎、校地を候補とする、この単純な表現だと思うんです。現実には大町北高へ通っているわけですから、単純な距離が近いというだけの表現でこれが発表されたという裏付けがなぜあるのかということも、ちょっとお伺いしたいなというふうに思います。

あと、この実際の公表された木曾もそうだと思うんですけども、突然発表があったそ

の地域、当事者である学校、これらに対しての説明責任といいますが、どういう形で行われるかどうかということもあえて付け加えさせて、どういうふうに行われるのかなということをお伺いしたいなというふうに、逆に質問になりますけれども。

以上です。

（中條委員長）

はい、一応お話しいただいたというのは、地域校の取り組みの例として、最近そういうふうに書かれていましたから。

編成案についてご質問いただきましたけれど、そこだけお答えいただいて、これは議論するなら議論するので、今いったん魅力付けを中心に、個別個別でも構わないと思いますけれど議論をしていただきたいと思います。

では今、ご質問ありましたことをご説明いただけますか。

よろしいですか。

（吉江高校教育課長）

今、下川委員さんからお話していただいたわけなんですけれども、実は、今回お出ししましたのが、中心になっているんです。これは、冒頭の次長の説明の中にも申し上げましたし、また、私も過日教育委員会でお決めいただいた案にそのような部分で、お決めいただいたという経過がございます。そんなことで、委員の皆さまのほうには、文章がそれぞれいっておりますので、ご覧いただいていると思いますが。若干構造だけをご覧になられた県民の皆さまの場合は、この文章全部が入っていませんので、いまひとつ、さらに分かりにくい面があるかと思いますが、若干の文章化の中では触れさせていただいております。

ただこれを、あまりそういうふうなご質問について、果たして細かくさらにご説明をするのが果たしていいのかどうかというのが、私は正直申し上げていかなものかという気がしております。と申しますのは、検討材料ということでお出ししている限り、ここで、細かくこういう理由、こういう理由というものを挙げれば挙げるほど、その位置づけが濃くなってしまうのかなという気がしております。実は、過日の24日の記者会見の上でも、ちらっとその話題が出たんですが、それについてどんなもんかなというような感情を抱いているんで、その点をどんなふうにお感じですか。ちょっとそこは、今後も他の推進委員会において、いろいろ議論が、確か第一推進委員会にはそういうような話題は出なかったようなんですけれども。今後、他の推進委員会においてもいろんな議論が出れば、どの程度、逆に申し上げればいいのかということについて、若干思うところがあるわけで。そこら辺はどんなかと考えています。

（中條委員長）

これは、個人的な意見で言わせていただいた上で、皆さんの意見をいただきたいと思いますが、少なくとも、ある答えを導き出すためには、何故という理由、背景がないと、納得もできなければ、逆に説明する側の説明責任は果たせないというのは、いわずもがなだと思います。ただ、今の、記者会見のご心配は、これそのものが、ある意味独り歩

きをすることを助長すべく、数字なりを挙げて、比較検証したときに、もうこれしか答えがありませんということで使われてしまったら、本末転倒です。

従って今後、場合によってはこれ以外の高校名を当然出して議論する必要もあるかもしれませんし、今、下川委員から言われた、例えばなぜ大町なのか、大北地区なのか。そうなら、安曇野地区はいいのか、都市部はいいのかといったときに、何かしらの検証材料の比較において、納得できるのかできないのか。ただ、ある違う数字を出していただく、数字だけかは分かりませんが、それを出していく必要があるかというときに、今のなぜかだけではなくて、なぜかという理由の比較、公表するための資料として、今、いただいたご質問が、どの時点かというお約束できませんけれども、検討過程の中でそういう場面でどうするのかという前提でよろしいでしょうか。

それから、ご意見のほうはまたこの委員会とは別になるのかもしれませんが、それは、県教委のほうで控えておいていただきたいと思います。と思っています。

それでは、一応地域高校の取り組みということで、今、白馬高校の取り組みをご紹介いただいたのですが、先ほど百瀬委員からもありましたように、第4通学区だけを見ても、各高校の取り組みがこれまでも行われてきたという資料もいただいていますし、直接説明いただける立場としてなにかなと思っていますので、県教委として、先ほどいただいた資料とは別に、何か特徴的な魅力付けの取り組みを今までもしてきていくというような、一例二例を、先ほどは各論といいますか、目標としてただ説明いただいたわけですが、魅力付け等でいい事例があれば、ぜひ、一二ご紹介していただければと思いますが。

（篠原教育幹）

資料もでておりますので…、

この第4通学区は、これさまざまな特に職業高校、いわゆる専門学科ついてですね、例えば南安曇農業高校、先ほど、南農と豊科というようなご発言の中で、南安曇農業のことがふれられましたが、実は南安曇農業は、これまでもいろいろな特色ある農業を生かした取り組みをやったんですけれども。昨年度から、南安曇農業の農園のリングなのですが、りんごの木を一般の方たちに貸し出した、こういうようなことをやっております。本当は手入れなども、すべてその都度その都度、一般の方が来てくださればいいのですが、なかなかそういう時間も取れないということで、生徒たちが、その間はかなり手を入れて整備する。そして収穫のときには、ぜひ来ていただくようにというふうな形で、いわゆる一般の人たちとの交流を農業という、その農業の道を生かして展開していく。こんなのが、南安曇農の取り組みでございます。

（中條委員長）

それは、議論前提の質の向上なり、学校の魅力付けということとは、どういう成果を期待しますか。

(篠原教育幹)

高校教育課教育幹の篠原と申します。これは、いわゆる、地域に開かれた学校づくりという一貫としても、取り組んでいる。まず、各学校が、どのような魅力をつくり出していくかということは、もちろん、当該の高校の校長先生たちも先生方も、これは知恵を絞ること、当然なんですけれども、ただそれだけではなくて、さらに魅力づくりを進める中で、すでに枠組みもかなり機能している方向になっております。いろいろなそういう周囲の人々から、皆さんから、ご意見を聞いてこんなことも可能なんじゃないかというふうな形で進めていく、これが魅力的なものではないかと。そうした中でやはり前提となる非常に大事なステップだと、そんなふうに思っております。前回この第4通学区の推進委員会には出席することはできなかったのです。前回も出されたということは伺っているわけなんですけれども、いわゆる塩尻志学館高校における総合学科の取り組みということであります。

委員長さん、教員評価検討委員会でご参加いただけますので、そういうのを言わずもがなという面も多々あるかと思えますけれども、やはりこの志学館高校、全国非常に多くの総合学科が先ほど資料でも見ていただいたように展開されているのですけれども、これは昨日の第1通学区においてもありましたが、確かに総合学科、非常にうまくいっているところ、それからいまひとつだということ、これは確かに現実的にはあります。その中で志学館高校は非常にうまくいっている学校のひとつだと、そんなふうに思っています。総合学科の問題はいろいろあるわけなんですけれども、塩尻の場合は農業、家政系、そして普通科と、この3つを人的な資源、あるいはシステムにしろ、そういうものをフルに活用し、さらに地元の市町村からも非常に厚い支援をいただきながら非常にうまく軌道にのった、そんな学校であるというふうに思っています。

総合学科の第4通学区では塩尻志学館高校という名前が、この高校案内にも載っておりますので、なかなか「じゃあ、次に」というふうにと考えづらい、そういう思いもあろうかと思えます。特に塩尻志学館高校のうまくいっている秘密、そういったものも探していただけなのではないかとお願いしてまいりたいというふうに思います。要は同じような仕組み、同じようなといいますか、普通の学級と同じ仕組みなっているのです。同じ仕組みをつくるのですけれども、やはりその中で先生方が周辺の皆さん、あるいは生徒たちの期待を受けて、いかにその熱い思いで、その辺に成功につながる。つまり、やはり、人がつくもの、そういう感慨はしているところです。まだまだ、この地区、たくさん特色ある取り組みはあろうかと思うのです。

(米澤教育次長)

もう少し違った角度で魅力、まあいろんな捉え方ができると思いますが、例えば先生方お1人お1人ができる範囲、まず個人のレベルでできる魅力づくりというのがあると思います。それから学校という単位で、学校という取り組みの中で行われる魅力づくりということもあると思います。また学校を超えて系統的に改善できるという、この3つがあると思うのです。今、例えば資料9で見ていただいているものは、いわば学校を超えるといいますか、系統的なものとして挙げてもらってあるというふうに考えればいいのかと思うのです。個人のことについては、当然先生方のいろいろなご努力で授業改善をしたり、日々生徒にアンケートなどをしながら、また研修を重ねてもらってやっていると思います。

例えば、最近では職業意識、企業マインドを醸成するという意味で起業家養成のコースに取り組んでいらっしゃる先生、個人の努力という魅力づくりがあります。

じゃあ、学校という単位で考えられる、例えば東部高校、東信地方の東部高校でございますが、レク授業というふうに呼んでおりましたけれども、今コミュニケーション授業という名前になっていましたものが、話題になっているかと思いますが、実は近くの保育園との交流を進めております。生徒たちは携帯電話等とても上手なのですけれども、いざ面前で面と向かって話をしたり、語り合ったり、触れ合ったりすることが結構苦手なものですから、そういう中でコミュニケーション授業というものを近隣の保育園との連携の中で、授業に取り入れております。子どもたち、実際小さな子どもたちと接する中で、最初はいわば少し「わにて」、これは方言ですので何て言ったらいいのですか少し恥ずかしがったりしていますけれども、そのうち慣れてくるととても今まで見せたことがないような表情を高校生が見せて、自分が頼られたりする場面も感じるわけです。そうするといつのまにか園児たちと仲良くなってお兄さんの、お姉さんの、異年齢交流の本当にいい意識が生まれてくるということで、とても注目されている授業のひとつでもあります。それは学校として指導する中で教育課程上に位置付けております、そんな新しい魅力も育てて頑張っておられます。

それから、例えば梓川高校であります、「総合的な学習の時間」というのがあります。梓川高校さんについては、この「総合的な学習の時間」という時間が設定される前から地域との連携をかなり深く意識した、「地域」という科目をこしらえまして、積極的に地域内の施設に出掛けていって、その中に入っている方々と交流を進めたりするなど、大地に根を下ろしたような取り組みを授業としてやっておるわけです。それによって地域のことを知りながら、またコミュニケーション能力を高める、そして、そのことを自分は何をしてきたかということを発表するという中で、このCS（教育課程）上の、工夫ということで魅力づくりということも考えております。

それから、学校を超えるシステムとして、今、資料9にあるようなこともあります。例えば、英語科、理数科、音楽科というようなところ、あるいは最近では国際教養学科のようなところで、それぞれのより特化した中で、より学問的な高さも求めながら頑張っている学科もあるわけでありまして。例えば平成6、7、8年あたりに「学校間連携」というのがありますでしょうか、平成6、7、8年と右側のほうに「学校間連携」と書いてあります。下伊那農業と飯田長姫高校が、農業科目、工業科目、商業科目ですか、連携をやっています。それから須坂商業と須坂園芸でも、商業科目と農業科目の連携をやっております。それから北佐久農業と岩村田、ここでも農業科関連科目と工業科目との連携があります。そういう連携が、比較的近隣にあるものですから、それぞれの学校に行って授業を受けるという形で、すでに3組6校で実施されております。こういうのがひとつ、これからの魅力づくりのシステムとして、それぞれの学校がどういうふうに関連していくか、また、単位互換、勉強がそれぞれ補完し合えるかというようなことが考えられるわけでございます。例えば、ある学校でこうした専門科目がない、なければ近くの学校で授業を受けてみようか、また、この学校ではこの科目はちょっと進学には不足だと、この学校で授業を受けさせてもらうということも、これからは考えられると思います。これが学校を超えるシステムとしての魅力であります。

そのような考え方としますと、教員の個人レベルで教室内でできること、学校全体でできること、そして学校を超えるシステムとしてできること、こんなふうに分ければいいのか、高校再編のところに关しまして、この3つの間を少し区別しながらといいますか、それぞれできることがそれぞれあるというふうに、また多様性を考えながら、お考えいただければと思います。

(中條委員長)

今の米澤次長の発言も、梓川高校はそれも含めてとなりますが、最終的に地域とのつながり、かつ、学校間連携というところは、どちらかという生徒たちの魅力付けというふうな制度として?説明いただきました。それから先ほども百瀬委員からありました、志学館、塩尻高校と志学館総合学科、私見でいいので、その中でそれを抱える自治体の長として小口委員さんは、どんな印象をお持ちなのか、もしくは百瀬委員はどんな印象をお持ちなのか、どちらでも結構です。

(小口委員)

はい。じゃあ、私もは、決してネガティブに言うつもりはございません。最初騒がれたこともあり、余計目立ってきた部分もあって、いいところばかりじゃなくて、あえて悪いところも申し上げたいかなと思います。さっき申し上げました生徒にとって望みの点で、イージーな単位取得に流れる人もたくさんいるということが、ある親から、具体的には行政をテーマにしているような、いろいろな。こうしたひとつの疑問です。

また先ほど今井委員さんからありましたが、その横に私学があるものですから、私学は個性を出しやすい、また魅力も出しやすいということもあるわけですが、そこにおける地域住民に対する、いろいろなモラルという、完全に近いもので、余計比較されてしまっていないのですが、問題ではないかということもあると思います。

しかしながら、中にいる生徒は、イージーのほうへ流されるというのが裏腹にあるのですが、自由度があるということは、非常にいいという考え方をしております。かつ、また、いろいろ言われる私学も、単位互換できるシステム。昨年、これは武蔵工大二高の崎田校長先生が先進的に取り組みまして、さらにその幅が広がったということです。まだ20~30人の生徒が利用している状況ですかね、その部分はどんどん広がっているという気がします。

それでこの4通学区の中で、例えば先ほど出した白馬高校から魅力があるから志学館に通えるかとなると、非常に難しい課題ではないかというふうに感じている問題です。ただ、魅力ある第4通学区、あるいは活力のある第4通学区という形ですね。もし、この12月に私たちがタイムリミットを抱えているのであれば、ひとつの模索として研究していかなければならないことです。

(中條委員長)

百瀬委員何かありませんか。

(鈴木委員)

今、白馬の話もあって、梓川の話もあったりする中で、そういうのを見込んでですが、いわゆる地域高校といわれる小規模校は、例えば白馬の場合は観光コースというのがあり、梓川の場合には最初「一般教養」という科目を設置して地域学習が主流に。どういうこいとかというと、地域を支える人材を地域の学校でつくりたい。そのことが地域の要望ではないか。白馬の場合には、例えば観光者が訪れたときに村民はすべて、白馬村の観光案内がまがりなりにもできる。そういうことで地域を支える。この学区ではないのですけれども、他地域高校には福祉科を置いて、その福祉は別に福祉の専門家になるというのではなくて、いずれお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんが年老いたときに、何か介護の技術、知識を知っているそういう村民、町民が地域にいるということが地域の助けだということと地域を支える人材づくりと、そのための魅力は何かという発想から設置されたと思います。そのことが今までに出ているように、生徒の視点で見た魅力だったり、あるいは地域の住民から見た魅力だったりというこの視点というのは、広くこの4通全体でもつということ、高校のスタンスとすれば、そういう方向が必要じゃないかと思います。

(中條委員長)

鈴木委員の発言に関連させていただきます。

委員としては蘇南高校の魅力設定、魅力づくり、取り組みというのが今、出ていますが、少しお話いただけますか。

(鈴木委員)

蘇南の場合には、小さな学校ではありますが3学科あるのです。やはり一定の地域の生徒が来ますからその進路希望、学習希望など多様なわけですね。そんな中で、場合によっては「私は普通科に行きたかったのだけれども、実は多々の関係で商業科に来た」。そういう子どもにも、例えば普通科の授業が受けられるような、「報告」で様々なタイプとして示されている、いわゆる総合選択というのをやっていますけれども、なかなか、中でやるには大変で、いろいろ工夫しないといけないという面もあって、さらに研究していかなければならないかと考えていますけれども、蘇南としてはそういう形でやっています。

ただ資料の9にあるように、コース制をやっているほとんどは、県下では地域高校です。地域高校は、この一定の地域から生徒が来ていて、要望がさまざまなので、取りあえず3学級、2学級の学校でも4コース、3コースを実施して、できるだけ生徒の要望に応えようという努力をしています。

(今井委員)

ちょっと質問してよろしいですか。

志学館高校と、あと平成何年度ぐらいからですか。4年ぐらいから、理数科とか英語科とかありますけれども、その1回目の1次の応募者数というのは記録がございますか。

志学館高校になる前、普通科から総合学科に移った場合、それから専科を設ける前とあと、応募状況はどういう感じ。

(小口委員)

多分生徒さんから見た場合のこの学校の魅力が増したかどうかというのは1次的なその数を見て、ある程度の傾向、これくらいかなというぐらいのことは、少し分かるかなと思って、そんな人が見落とすというところとは、どういうところかなと思うときに、ちょっと知っておきたいのですけれども。

(吉江高校教育課長)

データとしてはあるのですが、すみません。今日ちょっと手元に持ってきていないので次回ということによろしいでしょうか。

(中條委員長)

今井委員、それは変わったときの、前と後の。

(今井委員)

そう。そのときに、応募者がその10年度の傾向と、そのあとの傾向というのがあれば。学校内で調整する前に、ある程度出てくるじゃないですか。それが多分一番分かりやすいかなと思います。

(中條委員長)

イメージで申し上げたらいけないのですけれども、塩尻はその専門校の成果が少しずつ表れてきたというふうに理解しています。

(篠原教育幹)

先ほど言われたとおり、ちょっとあいにく志学館につきまして、詳しい数字はないのですが、第1回のときの全日制で見ますと、ちょっとお配りしてある要覧、少し厚い部分ですが、それによって、この要覧に塩尻志学館高校。

(中條委員長)

何色ですか。

(吉江高校教育課長)

緑色です。薄い、うぐいす色と申しますか。前から、四校目です。

(篠原教育幹)

26ページご覧ください。26ページ下のほうですけれども、塩尻高校、あるいは塩尻志学館高校の子どもたち、生徒が卒業時にどのような学校を志望していたかということなのですけれども。下のほうをまずご覧いただきたいと思うのですが、ずっと左側の棒グラフですけれども、13年度までは塩尻高校、14年度から第1期生が出てきましたものですから、ご覧になって分かるように、これは13年度につきましては、3年生が塩尻高等学校生で1年生、2年生は塩尻志学館高校生。その当時2年生に、ひとつは刺激を受けるといいます

か、3年生が刺激を受ける。それからもうひとつは、学校の体制として最後の塩尻高等学校の卒業生、これにしっかりと希望する進路を実現させていこうという気持ちもありました。

そういう中で、13年度の最後の塩尻高校につきまして、これは単純に4年制大学を志願した数ですけども、43という形で、それまでよりも伸び、そして14年度からはこの学校の1期生という形でご覧になったら分かります、なかなか国立大学も入れなかったわけなんですけども、私立の学校にも入れるそのような形できちんと入れる、そういう学力を活動させているということが言えると思います。

(中條委員長)

ありがとうございました。

今、聞いていただいた4通学区制という、先ほどの塩尻志学館で小口委員から、「そうはいっても白馬から来られないだろう」というお話があったのですが、乗車駅からすると木曽地域は上松から、それと、大系線は安曇追分が、最北端、最南端になっているようです。

はい、ほかにございますか。

(丸山委員)

それで、私、魅力あるということにこだわっているのは魅力あるのには2つ。ひとつは生徒の希望、ニーズに応えられるということと、もうひとつは先ほど今井委員さんがおっしゃいましたように質を高めること、この2点になると思うのです。その結果として高校数、これはやはり減らしたほうがいいという、そこが大事だと思うのです。私、卒業生に何人か聞いてみたのですが、市内の普通科の高校に通っている生徒に「何が魅力、また今、何を楽しみにしているか」と聞いたところ「部活動、生徒会が活発である、生徒が落ちついている、制服がある」。特に部活動とか、生徒会というところに魅力を感じている、などで志学館高校について、行っている生徒に何人かに聞きましたら「選択制がいい」とのこと。ただ「目的、目標がない生徒にとっては大変だろう」と言っていたので、やはり選択制というのは、非常に子どもにとっては魅力があったと。それから明科にスポーツ系のコースがあるのですが、この高校については「もう少しこれがスポーツ科みたいにして、充実するといいかな」、そんなことを言っていました。もしそういうことを充実させるとすると高校規模としてはどうなのか、もうちょっと大きくなければならないとか、そういうものが、やはり数のことと関連してくるのかなとそんなことを思います。

それから質については、やはり2000年の11月ですか、ある経済新聞が「教育を問う。学びを忘れ、日本が沈む」という大キャンペーンを張っていたのを覚えています。やはりその面での質というのを、今回高校数を減らす中で真剣に考えていくことが大事かなと、そんなふうに思っています。そんな中で子どものニーズに応えるということ、今回出されている連携からジョイントというのは非常に面白いというか、すぐできることですし、総合学科はここにありますが、全県下あってもいいのかな。それから多部制・単位制も、やはり子どものニーズはたくさんありますし、こういうことが高校数と関係なくできるところは魅力ある高校づくりに向けて進めていっていただきたいなと、そんな思いがあります。

以上です。

（中條委員長）

今の丸山委員のお話にあったのですが、前回の中ではまた校名は出ていませんでしたけれども、第4通学区の場合は、すでに塩尻志学館に総合学科を設立されていること。それから全日制はどうするかという議論は当然あるのですけれども、すでに単位制という意味では、松本筑摩高校にあるので、ある程度この通学区でいうとその時点では、まだ校名は出ていませんでしたが、そこが総合学科で多部制・単位制という学校とすれば、今の持っている状況の中で、こういうものもあり得るだろうという立場で進められるのですが、その中で志学館に行きたくても、白馬から通えるかとか、木曽から行けるかとかの中で、連携とかジョイントという意味では、今のお話のように大北地区であれ、木曽地区であれ可能だと思いますけれども、ミニ総合学科みたいなものをさらに1地区1校でなければいけないとかどうかはよく分かりません。そういう可能性とか、もしそこを希望してもなかなか通えないという場合の、代替案というか対応を、我々がさらに魅力付けの議論をしていく参考として、何か現時点でのイメージはおありですか。

（吉江高校教育課長）

ほかの通学区におきまして、実は例えば総合学科高校は1つと言わず2つ3つあってもいいのではないかと、あるいは多部制、単位制についても1つと言わずにもう少しあってもいいのではないかなというようなお話が出たところもございます。ただ私も基本的には、先ほど見ていただきました資料にもございますように、現在ing形で準備をしているところを合わせても、公立高校におきましては全国で、確か259ぐらいが総合学科を立ち上げようとしている状態の中で、長野県内は1校しかないということで、まず各通学区に最低1校ずつから整備したいかなというお考えの中で取りあえず、こういうようなご提案を申し上げた次第です。

また総合学科とは違うタイプで、先ほどたまたま蘇南高校の中で、鈴木委員さんからお話がありましたように、いわゆる結果的に総合選択制と言いますか、これは単位制ではなくて学年制という形で若干違いますけれども、今後統合するような学校とかに、当然ながら今まであった学科というものを組み入れていくというのが出てきますので、そういうような選択肢もあろうかと思います。ただ、委員さん方のご意見の中に、例えば委員長さんからもお話がありましたように、ミニ総合学科みたいなものを、ぜひこの地区に入れられてもらいたいとか、そういうふうなご提案があれば、これは正直に申し上げて議論を深めていただきまして、それぞれの地区の委員さん方のご判断の中で検討していただければと思っています。ただ、冒頭に申し上げましたように、現在、あまりにも私も総合学科も多部制・単位制も連携的でないものですから、それをまずそれぞれの地域に整備して、その状況によって、今後増ということも考えたいという気持ちではあります。

（中條委員長）

前半の議論の中で「当然、魅力付けには、投資が必要だろう」という、皆さんのご意見もありましたけれども、我々がその実現化の対象までできて提案できればですが、そういうものとすれば、そういう意見に対しての検討の材料として議論するのだというのは可能なのでしょうか。

（吉江高校教育課長）

当然ながら新たな学校および今後、統合する学科と学校というようなものがあれば今の状況の中で、全く新しい校舎を別に造るという設定までは考えておりませんが、何らかの形で信頼とかも深めていく先生等が必要になってくると思います。それと総合学科高校というのはほかの学校に比べますと、いわゆる単位数が多いものですから、当然ながら教員の数とか、あるいは非常勤の講師とかが増えてまいります。そういう意味では何らかの投資は今後必要になりますので、それぞれの地域からご提案いただいたものを取り入れていく中では、当然掛かる経費は我々どもとしても、財政当局とも相談しながら、何らかの形で処置していきたいと思います。

（中條委員長）

総合学科や多部制・単位制につきましては、今日は特にほかの議論は難しいかもしれませんが、今後の魅力付けの論議の中で、もう決まった我々の第1回の印象はあったのですけれども、そのプラスも含めたところは、もう1度議論させていただきたいと思います。

それと少し話を戻しますが先ほどの下川委員さんから魅力付けという観点からすると、地域校等がいろいろ熱心に取り組んでいて、ややもすると都市部校が冷めているというご発言がありましたが、決してそうではないということも含めて、都市部校代表として藤本委員。すみません、都市部校としての魅力付けの取り組みという観点ということですから、何かご発言はありますか。

（藤本委員）

都市部校地元だから、ということではないですが、それぞれの学校が特色の課題があるのです。うちの学校だと、地域というか県全体の期待からすれば、生徒の力を精いっぱい伸ばして、難関大学に入れる力を付けるとか、あるいはそれぞれの個性を伸ばしてやって、自立した人間を育てるとか、そういったものがあると思うのですが、そういうものを中心に置きながら、どんなことをしたらいいかが魅力づくりになるかと思うのです、今のお話のように。

そうですね。何と言ったらいいのか。そういう観点で、とにかく先ほどお話があった地域と連携すること。それから学校というのは人材ネットワークの資源が非常に豊かなので、特にうちの場合だと、同窓会の方の資源も豊かですので、そういった方の力を借りていわゆる社会的講師というようなものを使って、生徒にいろいろな刺激を与えていくということです。あるいは、魅力ある授業づくり、こういったものを厳しく組織して、そういったものをおして魅力ある学校を創る。これがただ勉強だけというだけではなくて、やっぱりクラブなどをきちんとやらせていくなかで、そういうものが活性化していくと、その学

力面でも活性化すると私は思っております。

ただ今言ったように、地域の皆さんと一緒に何かやることについては、あまり表に出ていないのですが、うちの場合でも例えば病院へ行ってコンサートで生徒が出演するとか、地域の公民館活動に生徒が行って、お年寄りの皆さんに音楽聞かせるとか、そういったことはやっています。

（中條委員長）

逆のご質問になりますけれども、魅力付けを検討するために、逆に質も触れてもいいと思いますが、具体的な校名ではなくて魅力のない学校というイメージを送り出す立場で丸山委員、長谷川委員、もしこんな学校は魅力がないから、もしあったらこうしてほしいというご意見があればお願いします。今を踏まえてという意味は全くありません。

（丸山委員）

ちょっと先ほど言ったことと同じなのですが、魅力あるの反対がないだと言いましたが、子どもにとっては制服だってひとつの魅力なのです。特に保護者にとっては、学校が落ち着いているだけでも魅力です。それから部活動とかある特定の部がしっかり活動していつも全国までいくと、その学校へ行ってそこでやりたいなというのがありますよね。そうすると全国で活動するには、ある程度規模というものも当然備わってきます。ですから、それぞれの学校によって全部魅力が違うわけであって、それぞれの学校がまずいろいろな個性・魅力を持つために何をするかということが、やはり大事です。その下に見えないものとして各自、学校関係者ですから、いかにして魅力のあるいい授業をするかと、それは表には出てこないけれども、一番は学校は授業が勝負という、それが究極のことだと思います。それはちょっと数のこととかそういうことから離れますが、子どもにとってやはり魅力のあるのは、落ち着いたいい授業が提供できる学校に尽きるわけです。

（長谷川委員）

私もやはり感じるのは、最終的にはやはり雰囲気落ち着いているところというのは非常に得であろうと、行きたがる可能性が高いと思うので、よく生徒に進路の話をするのは、いい高校は合う、合わないというのが大事でして、自分が目指しているものにきちんとヒットしているかどうか、職業科なんか特にきちんと選んでおかないといけないもので、そのところで目的意識があればやはりそれに合ったところを選び、なかなかそういうのがあるまいなところで、やはりイメージとか都市部だとか、例えば制服であったり、特徴とか魅力と感ずることというのは、やっぱりさまざまありますよね。

それとは逆の面で、今回の高校案が出ていたところでありがたいと感じたのは、松本筑摩高校が多部制・単位制高校として挙がっているのですが、非常に生徒指導的に大変な、申し訳ないけれどもこういう子は大変かもしれないけれどもお願いしますと言うと、割と心よく引き受けてくださる学校で、結構熱心で生徒指導に関しては。

その校長先生はやはり、たまたま多部制・単位制についてもちらっと考えていると聞いたことはあるのですが、これをぜひ柔軟にして、例えばうまく高校生活を送れなかった

りとか、あるいは中学校でうまく登校できなかった子に対するケアというのがしっかりできるようになっていくように、この話聞きながらやっていければ、きっとそちらのほうでもうまくやっていけることはあるのではないかと思います。

（中條委員長）

松本地区は、すでに単位制は実施しているということですか。

それでは直接的ではないかもしれませんが、最近なかなか数が減ってしまったようですが、採用する立場で今井委員、魅力づくりという観点で、何かありますか。

（今井委員）

私も、今、実をいうとちょっと古い話になってしまうのですが、正直バブルの時代が過ぎて地域の方向性が、高校だけではなく近隣の高校まで出て行って求人いたしました。それで、そのときにこの学校は何となく好きだなというような感じを持った学校というのは、大体まず清掃が行き届いていて、きれいな学校です。逆に荒れている学校というのは、本当に汚いのです。生徒もやはり、上と下の履物をちゃんと区別しないというようなことから、学校の中がその生徒さんたちの気持ちが荒れているのがそのまま廊下に出ている感じだと思います。ここの生徒を採ったら大変だろうなと思っております。

高校生だけではなくて、大卒・中退も採っているのですが、今一番採りたい人材といたしますと、やはり基本的にはコミュニケーション能力なのですね。どうしても例えば昔のイメージですと、エンジニアというのはコツコツまじめにきっちりやってくればよいというような感じで考えていたのですが、今は私どももPC、ノートパソコンのいわゆる設計業務から仕事やっていますけれども、大体パソコンひとつ基本モデルやるのに、電気屋さんメーカーさん、機械屋さん、ソフト屋さんと一緒にしないとよくできないのですが、結構大きなチームでやっています。ものは小さいのですが、あれは回路数にするとこの部屋一杯になるのです。その辺やっぱり小さいのですが、ひとりで、ソフトさんとハード屋さんともすごく密接にコンタクトしていないと、いわゆる変なバグが残っちゃったというように、だからこのチームが、本当に意思をきちっと尊重し合いながらやっていかなければならないということで、やはりエンジニアといえども1人個人ではやっていけないということですね。

次にどんな人が必要かという、企画力です。こういう問題ができれば、それをどういうふうに解決していこうという、問題解決能力というのか、そういう自分で問題点を会したときに、自らその解決策をつくり出して、その解決策に沿って動けるという、こういうところが一番欲しい人材なんだというふうに思っています。

今先生おっしゃった中で、クラブ活動とかいうのが学校全体の選択肢の中に入っているとかいうことがございますけれども、やはりその中である程度人間的にもまれてきた人間というのは、やはり我々は欲しいというふうに思います。

（中條委員長）

高校から直接採用されるケースもおありかと。

(今井委員)

採用しています。

ちょっとそこら辺の話が、私がこの委員をやるようになった推薦団体である母体側にしますと、非常に危機感を持っています。結構長野県広い県ですから、かなり力のある企業が多いと思うのですが、今のこれだけある企業群を支えていくだけの人材が地元から供給してもらえなくなってしまうのではないかという危機感を抱いております。

だからそのためにはもっと地域の教育を活性化して、そういうところを感じていただきたいかなというふうに思っています。

(中條委員長)

そういう危機感も、何十年も採っていらっしゃると思うのですが、高校の教育成果が 3 年後、5 年後、10 年後どうだったのか、今井委員の会社へ調べに来られたり聞きに来られたりという学校はおありですか。

(今井委員)

ありません。

一言で言うと申し訳ないですけど、昔 17、8 年前ころから、いつときかなり拡張しなければならなかったので、採用セミナーというものを持ちました。そのときの進路指導主事の先生方は、大体春先 4 月 5 月に回ってきたくれたのです。4 月 1 日に入社した卒業生がどうですかというのと、生徒に会って顔だけ見て帰って来るといようなことをやったときに、これが大体スケジュールみたいになっていたような気がしたのですが。

それが絶えて久しいですね。

(中條委員長)

個人的な意見として。

(今井委員)

そうですね。

(鈴木委員)

その魅力のことで、取りあえず好き勝手に、みんなそれぞれの思いを語るのはいいのですが、今日は最終報告にどんな新しいタイプの学校が紹介されていてどんな新システムが提言されているかという辺りを見なければいけないと思うのです。私はいわゆる地域教育プラットフォームに興味を持っているのです。というのは、先ほど大系線の問題もあったのですが、生徒は、行動の面でもいろいろな問題があるのですね。そうすると、やはり大人の目から見ると、「これは」と思わせるような行動をとる生徒もいるのです。ある中学校の校長先生が書いたものを見せていただいたのですが、中学生の荒れの大きな原因は学力だ、授業を聞いていても分からなければそれは授業じゃないのです。そういうときに私が心配なのは、地域の学校で高校も小さいのですが、小学校も中学校も小さいのです。そうすると例えば英語の専科の先生が、その中学校に何人いるのか。小学校に算数の専門の先生がきちんといて、全ての生徒に教えているのかということそうではないのです。中学校で

専門外の先生、例えば理科の先生に数学を習ったりとか、国語の先生に英語を習ったりというそういう学校は少ないと思います。

そういう中で、この地域の教育がどうなっているのか、興味があるのは、例えばその中学校の校長先生の書いた本によれば、尊敬できる先生というのはきちんと教えてくれる先生であり、授業もそうだし、クラブもそうだというのです。そうしたときに中学校にいる人材を高校で活用させていただいたり、あるいは高校にいる人材を小学校・中学校で活用する中で地域の子どもの学力を育てていく。高校という県立の教育機関が地域に果たす役割としてのひとつのキーですね。地域教育プラットフォームというのは、そういうものであるのではないかと思うのです。この通学区の特徴からいえば、報告の中にこの辺のところをきちんと書いて、例えば北とか南のところでNPOとかボランティアに頼るだけではなくて、例えば県で一定のプラトホームを設定をしながら、地域の教育をつくっていく、教育環境を整備していく、その辺のところも、やはり高校改革のひとつとして、あるいは県立高校としての役割のひとつとして、加筆してもいいような気がしているのです。

それぞれの地域の期待に応えるという。

(中條委員長)

まず、いずれにしても具体的な魅力付けをどうするか、すでに魅力付けという観点から、先ほどから提起されている連携するなりという新しい形態が一旦は説明が数行であれ示されています。

それに対して、是非を論ずるためには、今の魅力というのはどういう問題課題、それが保護者の立場であり、学校の立場であり、採用する立場でありという中で、その上で今の必要性を議論しないと、何故これをやるべきだという最終の結論、回答を出すときにも、説明を果たせないのではという面と、そういう意味で今の鈴木委員のご発言に対して皆さんどう思われたか聞きたいと思いますが、ここに書いてある抽象的なものを具現化する、具象化するという部分をことにですね、確かにある意味、野口委員はNPOの先輩でいらっしゃるので、NPOというのはどういうふうにつくってどういうふうにやっていけばいいですよということでもいいでしょうし、民間の方、企業の方、学校の方も、それから実際にもいらっしゃるので、そういう形でのNPO的な、もしくはある特定地域でのプラットフォーム的な、具体的な動きがつかれるかどうか、そこまで議論しないと、なかなかいい案ですよというだけでは、この第二次報告案で終わってしまいそうな気がします。ちょっと今、地域プラットフォームに関しては、皆さんもう少し勉強させてもらわないと、資料もいただきながら、いきなりの議論は少し難しいかもしれないという気もしています。申し訳ありませんが。

あと、確かに鈴木委員おっしゃるように、抽象論でいろいろ言っても始まらないよという前半の小口委員のご指摘もありましたけれど、もしできれば、今のそれぞれの違う立場での問題提起を踏まえて、次回個人的にそれぞれで、先ほどありました特に中高の大北地区ですとか、そういった木曽地域の連携となり、ジョイントとなる可能性がある、それから都市部も魅力付けをしていくとか、単純に企業でいえば、地域のほうがかえってニッチマーケットでつぶれることはなくて、逆に市場が下がってくれば、シェアの3番目、4番目のほうが、むしろつぶれていくというのが市場の論理ですので、決して都市部が冷めて

いいとか、そういうことではないと思うので、その辺も合わせて議論をしていければと思います。

時間があと5分もありませんので、いったん簡単で結構ですけど、今日ご発言いただいている野口委員と小山委員、ご自分の立場で結構ですので、お願いします。

（小山委員）

今魅力づくりについていろいろ話されていたのですが、先ほども出たのですが、最終的にどういった方向で答えを出していくかという具体的なことがよく分からないのです。今の話の中だと、今日の資料の2番のような魅力づくりの例に出ているような事柄だと思うのですが、どういった方向で意見を言っていけばいいのかが少し分からないのと、あと先ほども出たのですが具体的事項についても、部会等の設置について並行してできれば検討して、先延ばしにすると時間がないので、その辺も含めて検討してもらいたいと思います。

（野口委員）

地域の高校にとっては、やっぱり周辺の地域との連携ということも大切になるし、また魅力づくりに関しても、そういう関わりというのが魅力のひとつの方向であるのではないかと思います。そういうところを、地域にとってやりやすい場面、いろいろな地域起こしに関係したものに連携してやっていくと。

それから先ほど今井委員さんが県立高校であるならば、県外からの学生は受け入れるべきではないというご意見がありましたけれど、木曽山林高校のことを、ちょっと例に取って言いますと、特色のある、全国でも数の少ない学校ですので、そういう場合は窓口を広げていただいて、もっと広い地域、広い視野、広い心でもって、長野県として受け入れていかれたらいいのではないかという気がします。

（今井委員）

それは大賛成です。

（宮川委員）

今の中ですと、先ほど地域のある学生の評判というのが、出ているんですよね。生徒の立場からみたら、制服がいいからとか、校風がいいからだと。企業の方から見ればこういう生徒が育ってもらいたい、親の立場からいえば、「いや大学にそのまま入ったほうがいい」。そうすると魅力ある学校というものを、ひとつのところでやろうとすると、とんでもなく大きな間違いではないかと思うのです。

ですから特に、都市部はどこを選択して自分の目的に合ったところをやればいいのかいいです。ところが大北や木曽など、ああいうところになりますと、それ魅力と言われて、そうすると1校でこれだけの魅力を全部入れようと、これまた難しいことだと思うのですが、その辺の点のご意見をお伺いしたいと思います。

もうひとつ、先ほどから聞いておられますと、どうも先生の影がどこかへ消えてしまっているのですが、やはり私たちもそうですが、先生の印象というのはすごくあって、その先生に習ったからこうなったというのがあると思うので、魅力ある学校というには先生はい

かにかかわるか、その辺をぜひ議論していただくとありがたいと思っています。

（中條委員長）

多分地域という中で限られてしまっているけれども、個性的なものなどその中で地域と都市部の同じような環境というか多様性を与えられるか、学校間連携であるとか、そういうことでということは、やはりきちっとこの通学区というか、委員の中では議論すべきだと思いますので、ぜひアイデア、意見を次回にお願いしたいと思います。

それではすみません、議事がまずくて、もう時間ありませんので、今回は第3回なのですが、次回以降も委員会の設定について事務局のほうからお願いします。

（西牧主任教育支援主事）

次回以降の日程ですが、7月はできれば2回開きたいと思いますが、一応目途としまして、この前、委員の皆さま方のご都合をお聞きしたところ、7月10日、それから7月23日辺りを目途に開催をしたいと思います。また細かいところは委員長さんと相談しまして、あらためてご連絡申し上げたいと、こんなふうになっています。

（中條委員長）

7月10日は日曜日、23日は土曜日。両方とも今日と同じ時間帯を前提という。

（西牧主任教育支援主事）

大体そのように考えていましたが。

（中條委員長）

できるだけ、議論を重ねるという意味では月2回は、約束はできませんでしたが、していきたいと思いますが。今日は2名欠席ですけれども、できるだけ全員の方が参加していただけると、ベストになるのではと思います。

次回以降も土日が前提ですと、こういう環境の中で議論を進めるという理解でよろしいでしょうか。

（今井委員）

すみません、来月以降はもっと暑くなりますので。会議室ぐらいいつでもお貸しいたしますので、言っていただければ。

（吉江高校教育課長）

最後はお願いするにしても、最初から甘えても。お暑い時期になりますので、開催場所については、またあらためましてちょっと調整させていただきます。

(中條委員長)

白馬それから木曽の南から来られるので、できるだけ集まりやすく、かつ、そうはいっても3時間の議論に耐える環境をお願いします。

それでは、時間を超過しまして申し訳ありませんでした。第4通学区、第四推進委員会、第2回の委員会を、これで終了させていただきます。

ありがとうございました。